家別人別帳よりみた近世中期以降の越前民家

その6 要約と若干の問題についての考察

正 会 員 山 田 弘 康*

本論文は、家別人別帳記載資料を考察した5編の論文の要点を整理・要約し、近世越前民家の変遷の大筋をみた後、これら家屋の変遷がどのような社会的背景と関連し形成されてきたか、また、越前の角屋型家屋はどのような特徴をもつかを論じた。さらに、本研究で用いた史料の区分指標と史料の記載内容についても検討した。

6-1 要 約

本研究は、18世紀初頭以後幕末までの家別人別帳を、年代的に1700年以後25年毎に7区分、地域的に北部の坂井地域・中部の福井地域・丹生山地の丹生地域・南部の武生地域の4区分、階層的に～100石層、～60石層、～40石層、～20石層、～10石層、～5石層、～0石層、雑家層の8区分に分け、文書記載の家屋資料を統計的に整理し、各区分間の数値を比較・検討することにより越前民家の集団的特質の考察を行ってきた。研究は、これまでに5編の論文として発表し、考察項目ごとに、まとめを付してきた(注-1)。本章では、これらまとめを、村落、家族、家屋呼称、家屋形式、家屋構法、家屋規模、居住状況に分け、その大筋を整理・要約した。

〔I〕村 落

1. 村落規模は、戸数30～40戸、村人口120～240人、村高200～600石程度が多い。

2. 村落の階層構成は、高持・雑家(無高)・嬬・吃喰その他である。階層比は、高持と雑家のみをみると、雑家層が30～40%、高持層の平均的階層である～10石層までを含めると、それ以下の階層は80%近い。

〔II〕家 族

1. 家族形態は、直系型家族が80%以上、他は傍系型家族であるが、そのうち直系(I)2世代家族(核家族)が50～60%をしめる。幕末には、直系(II)3世代家族が増加、傍系型家族は減少する傾向がみられる。

2. 奉公人を含む高持層の1戸当り居住者数は、1700年代初頭と幕末をのぞくと、坂井・福井・丹生地域は5人/戸前後、武生地域は5.5人/戸強であった。幕末には、福井・丹生地域が約6人/戸、坂井・武生地域が約5人/戸となる。うち、奉公人は、最大0.75人/戸をこえず、幕末に減少または消失する。雑家層の1戸当り居

住者数は3人/戸前後で武生地域以外は幕末に増加する。

3. 1戸当り親族居住者数は、上層ほど多いが、幕末に近づくにつれ、高持上層の親族居住者は減少し、下層の親族居住者は増加する。奉公人は、年代・地域に関係なく、～10石層までほとんどみられず、～20石層から増加するが、幕末には、上層でも減少または消失する。

〔III〕家屋呼称

1. 家別帳記載の家屋呼称は、家・角屋・土蔵・小屋・座敷・角仏間・角水屋・水屋・角馬屋・馬屋・馬蔵・柴屋・柴小屋・こや・高屋・小家・わら小屋・板屋・長屋門・門・鋳鍋場・さしかけ・廊下の23種である。4地域に共通する呼称は、家・角屋・座敷・土蔵・小屋の5種のみで、各呼称を軒で数えている。

2. 家屋呼称からみた高持層の平均所有家屋呼称軒数は、幕末の坂井・福井地域が1.5軒/戸前後、丹生・武生地域が2.5～3.0軒/戸である。階層別にみると、～20石層から所有軒数が増加する。

3. 角部分呼称の地域分布は、座敷・角屋だけが4地域に共通し、水屋・馬屋の呼称は、地域により分布がこととなる。坂井地域に水屋・馬屋はみられず、福井地域には馬屋が多く、丹生地域は水屋・馬屋がほぼ同数、武生地域は水屋が圧倒的に多い。座敷・仏間は村内最上層にかざられる。

〔IV〕家屋形式

1. 住居部分の家屋形式は、角部分のない直屋型家屋と角部分をもつ角屋型家屋に大別できる。角屋型家屋は、年代的に1700年代、地域的に南部、階層的に高持上層と中層に多くみられる。幕末に角屋型家屋は減少し、南の武生・丹生地域の高持層は約50%、北の坂井・福井地域は100%が直屋型家屋となる。

2. 角部分の用途は、座敷・仏間・水屋・馬屋および居住用と思われる角屋と呼称される家屋である。

3. 角屋型家屋は、奉公人の多い年代・地域・階層に多くみられ、1戸当り角部分面積は1戸当り奉公人数に比例し、増減する。

4. 角屋・水屋を高持平均近く所有する階層は、～10石層、平均規模に近い角屋・水屋をもつ階層は、～20石層である。角部分の規模は地域により相違し、武生地域の水屋規模は特に大きい。

* 横浜国立大学工学部講師

(昭和50年11月19日日本稿受理・討論期限昭和52年4月末日)

5. 直屋の平面形状は、規模により相違する。6坪/軒以下の直屋の桁行/梁行比は1.4以下で、小規模なもののほど正方形に近く、桁行/梁行比1.6以上の直屋はほとんどみられない。但し、角屋型家屋の少ない竹田川流域の坂井地域北部の直屋は、比1.5以上が多い。

〔V〕 家屋構法

1. 直屋の床は、1781年の南部の武生地域の場合、雑家層の半分に「堀込」床がみられたにすぎなかったが、1820年前後の北部の坂井地域の場合、雑家層はもちろん、～0石層の1部にさえ「堀込」床がみられた。

2. 角屋の床は、1726～50年の坂井地域で、40石以上層が「板敷」、～20石層が1部「板敷」、20石以下層は「板敷」を用いていなかった。

3. 直屋の柱は、1726～50年の中部の福井地域で、～5石層が「石かけ」柱と「堀立」柱の境界層、～10石以上層は「石かけ」柱を、5石以下層は「堀立」柱を用いていた。

〔VI〕 家屋規模

1. 1戸当り住居部分面積の高持層平均値は、幕末をのぞき、坂井・福井・丹生地域が8坪/戸前後、南の武生地域が15坪/戸前後であった。幕末は、直屋型家屋のみの坂井・福井地域が7坪/戸前後、角屋型家屋が50%前後の丹生・武生地域が12坪/戸前後となる。階層別にみると、坂井・丹生地域の～0石層は約6坪/戸、～10石層は約8坪/戸で、年代差・地域差は小さく、～20石層から差が生じ、また、階層差も大きくなる。南の武生地域は、他地域より1～2階層分面積が大きい。

2. 高持層の住居部分のうち、直屋部分の平均面積は、幕末をのぞき、坂井・福井・丹生地域が7坪/戸前後、南の武生地域が10坪/戸前後で、地域によりほぼ一定している。幕末は、北の坂井地域の6.8坪/戸から南の武生地域の10.2坪/戸まで、約1坪/戸の差で並ぶ。

3. 高持層の住居部分のうち、角部分の平均面積は、1700年代の坂井・福井地域が1～2坪/戸、丹生地域が約2坪/戸、1800年前後の武生地域が5坪/戸である。幕末は、坂井・福井地域に角部分はみられず、丹生・武生地域の角部分は、約2.5坪/戸である。

4. 1戸当り非住居部分面積の高持層平均値は、1部年代をのぞくと、地域差は小さい。1700年代前半は1坪/戸、1800年代初頭は2坪/戸、幕末は3坪/戸前後で、年代とともに面積も増加し、全家屋面積にしめる比率も増加する。階層的に、非住居部分は高持層のみにみられ、20石層以上から面積が大きくなる。年代的に、幕末に近づくにつれ、その所有階層は下層へ広がる。

5. 住居部分と非住居部分を合計した1戸当り家屋面積の高持層平均値は、1800年初頭までの坂井・福井・丹生地域が10坪/戸前後で、年代差・地域差は比較的小さいが、幕末には地域差が広がる。1700年末から幕末まで

の武生地域の面積は、18坪/戸前後である。雑家層の1戸当り家屋面積は、高持層平均の40%程度が多い。階層別にみると、坂井・福井・丹生地域の～0石層は6坪/戸前後、～10石層も10坪/戸をこえることはほとんどない。しかし、高持上層の面積増加は大きく、年代差・地域差も広がり、～40石層は20坪/戸から30坪/戸が多い。南の武生地域は、各階層とも、他地域より1～2階層分面積が大きい。

6. 直屋部分の規模分布は～5坪/軒が多数で、幕末に近づくにつれ、規模は大きくなり、その分布はせばまる。角部分の規模分布は～2.5坪/軒以下が多く、年代とともに小さくなる。土蔵の規模分布は～5坪/軒が多く、小屋は～2.5坪/軒が多い。また、土蔵は幕末に増加する。

〔VII〕 居住状況

1. 居住者1人当り住居部分面積の高持層平均値は、坂井・福井・丹生地域が1.7坪/人、幕末にやや減少する。南の武生地域は、1776年以降であるが、2.6坪/人前後である。1戸当り居住者数と1戸当り住居部分面積は、平行に増減し、各地域とも、各階層の居住者1人当り住居部分面積を一定水準に保つ傾向をもつ。

2. 居住者1人当り住居部分面積の階層差は、各地域・各年代とも、比較的小さく、坂井・福井・丹生地域で最大値と最小値の差が1坪/人をこえる例はほとんどない。武生地域は、幕末に近づくにつれ、階層差が大きくなり、4坪/人となる。高持層平均値に近い階層は、～10石層前後である。雑家層の居住者1人当り面積は、高持下層と同程度が多い。

3. 居住者1人当り家屋面積（住居部分と非住居部分を合せた面積）の高持層平均値は、坂井・福井地域の1700年代が2坪/人前後、幕末が1.75坪/人前後である。丹生地域は、1726～50年が1.9坪/人で、幕末には3.55坪/人と増加する。武生地域は、1800年前後が約3坪/人、幕末が3.3坪/人である。幕末の坂井・福井地域と丹生・武生地域の間には、2倍弱の面積差が生ずる。雑家層は、幕末に近づくにつれ、居住者数が増加するため、居住者1人当り面積は減少する。

4. 居住者1人当り家屋面積の階層差は、非住居部分面積が大きくなる幕末に近づくほど、また、高持層平均値が大きい南部地域ほど大きい。高持層の平均値に近い階層は、武生地域が～20石層、他地域が～10石層前後である。

なお、近世中期と後期の状況をよくしめす1726～50年と1851～68年の諸統計値を、付表1～4に示した。

6-2 越前民家形成の背景

近世中期以降の越前村落には、前章で要約した家屋・居住者・居住状況がみられるが、これらがどのような社会的背景と関連しながら形成されてきたかの考察を以下

付表-1 坂井地域

階 型	1726~1750											1851~1868										
	階高比	親族数	奉公人数	家屋軒数	直屋部分 面積	角部分 面積	非住居部分 面積	合計家 屋面積	居住部分 面積	居住部分 割合	居住部分 割合	階高比	親族数	奉公人数	家屋軒数	直屋部分 面積	角部分 面積	非住居部分 面積	合計家 屋面積	居住部分 面積	居住部分 割合	居住部分 割合
戸数	305	2.75	0	1	2.72	0	0	2.72	1.21	0	1.21	34	4.2	0	1	2.63	0	0	2.63	0.63	0	0.63
雑家	25.8	3.85	0.04	1.13	6.51	0.23	0	6.38	1.74	0	1.74	17.5	4.78	0	1	6.0	0	0	6.0	1.26	0	1.26
~0石	136	4.2	0.07	1.34	6.1	0.61	0	6.71	1.57	0	1.57	14.0	4.13	0	1	5.87	0	0	5.87	1.42	0	1.42
~10石	164	4.34	0.23	1.74	7.5	1.6	0.4	9.47	1.97	0.08	2.05	16.5	4.82	0	1.18	6.62	0	0.53	7.15	1.37	0.11	1.48
~20石	89	6.43	1.17	2.79	11.14	2.6	3.14	17.9	1.93	0.43	2.36	11.7	6.33	0	1.8	7.34	0	3.75	11.09	1.16	0.99	1.75
~40石	14	6.3	5.7	4.67	15.1	8.1	7.5	30.7	1.93	0.63	2.56	4.9	5.2	0	3.2	11.25	0	9.75	21.0	2.16	1.88	4.04
~60石	14	7.2	2.8	4.0	12.8	8.2	9.33	30.4	2.1	0.94	3.04	1.0	7.0	0	3.0	10.0	0	12.0	22.0	1.43	1.71	3.14
~100石	1.9	6.25	5.5	5.0	18.0	8.5	14.8	41.3	2.26	1.25	3.51											
高持平均	69.5	4.55	0.96	1.81	7.7	1.58	1.4	10.6	1.8	0.27	2.07	66.0	4.98	0	1.38	6.8	0	1.09	8.49	1.37	0.33	1.7
平均的 村概況	%	人/戸	人/戸	軒/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	%	人/戸	人/戸	軒/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸

(注) 一居住者数は親族と奉公人の合計。住居部分面積は直屋部分と角部分の合計面積。家屋面積は住居部分と非住居部分の合計面積。

付表-2 福井地域

階 型	1726~1750											1851~1868										
	階高比	親族数	奉公人数	家屋軒数	直屋部分 面積	角部分 面積	非住居部分 面積	合計家 屋面積	居住部分 面積	居住部分 割合	居住部分 割合	階高比	親族数	奉公人数	家屋軒数	直屋部分 面積	角部分 面積	非住居部分 面積	合計家 屋面積	居住部分 面積	居住部分 割合	居住部分 割合
戸数	265	2.81	0	1	(2.2)	0						11.8	6.75	0	1	3.0	0	0	3.0	0.44	0	0.44
雑家	29	3.67	0	1	5.7	0	0	5.7	1.55	0	1.55	17.6	6.12	0	1	5.5	0	0	5.5	0.9	0	0.9
~0石	294	4.5	0	1.4	5.7	0.33	1.13	7.16	1.34	0.25	1.59	8.8	4.4	0	1.2	5.99	0	1.2	7.2	1.36	0.28	1.64
~10石	176	4.38	0	1.8	6.28	0.95	1.1	8.33	1.65	0.25	1.90	23.5	5.6	0	1.3	7.81	0	1.7	9.5	1.39	0.31	1.71
~20石	176	5.36	0.45	3.1	7.86	2.3	5.14	15.3	1.75	0.36	2.63	26.5	6.1	0	1.9	8.0	0	5.25	13.3	1.31	0.87	2.18
~40石	29	7.5	2.5	4.25	10.5	9.1	7.13	26.7	1.96	0.7	2.67	8.8	6.67	0	2.3	10.5	0	7.0	17.5	1.57	1.05	2.62
~60石	29	9.0	7.0	5.0	7.5	7.5	17.5	32.5	0.94	1.09	2.03	29	9.0	0	3.0	12.0	0	19.25	31.3	1.33	2.15	3.48
~100石																						
高持平均	73.5	4.9	0.41	2.15	6.6	1.33	2.93	10.86	1.49	0.56	2.05	88.2	5.88	0	1.52	7.6	0	3.14	10.74	1.31	0.54	1.85
平均的 村概況	%	人/戸	人/戸	軒/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	%	人/戸	人/戸	軒/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸

(注) 一坂井地域に同じ。

付表-3 丹生地域

階 型	1726~1750											1851~1868										
	階高比	親族数	奉公人数	家屋軒数	直屋部分 面積	角部分 面積	非住居部分 面積	合計家 屋面積	居住部分 面積	居住部分 割合	居住部分 割合	階高比	親族数	奉公人数	家屋軒数	直屋部分 面積	角部分 面積	非住居部分 面積	合計家 屋面積	居住部分 面積	居住部分 割合	居住部分 割合
戸数	526	1.0	0									39.6		0								
雑家	6.2	4.33	0	1.17	5.91	0.38	0	6.29	1.45	0	1.45	2.1	7.0	0	1.0	8.75	0	0	8.75	1.25	0	1.25
~0石	124	4.17	0.08	1.25	6.23	0.75	0	6.98	1.64	0	1.64	8.3	4.75	0	2.0	6.0	0.45	2.5	8.95	1.36	0.52	1.88
~10石	18.6	4.5	0.4	1.78	6.56	1.75	0.6	8.91	1.70	0.12	1.82	8.3	5.22	0	2.0	5.75	1.25	2.75	9.75	1.34	0.53	1.87
~20石	10.3	5.5	1.3	2.8	9.25	3.88	2.4	15.53	1.93	0.35	2.28	22.9	4.73	0.9	3.36	8.88	2.1	9.46	20.44	1.95	1.63	3.63
~40石												10.4	5.2	1.6	4.8	10.95	4.66	16.06	31.67	2.30	2.36	4.66
~60石												6.3	7.67	2.0	3.0	10.33	2.38	16.7	29.36	1.31	1.73	3.04
~100石												2.1	12.0	7.0	7.0	22.5	10.0	52.7	85.2	1.71	2.77	4.48
高持平均	47.4	4.61	0.46	1.8	6.93	1.77	0.76	9.51	1.73	0.15	1.88	62.4	5.51	0.72	3.24	9.02	2.42	10.63	22.07	1.84	1.7	3.54
平均的 村概況	%	人/戸	人/戸	軒/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	%	人/戸	人/戸	軒/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸

(注) 一坂井地域に同じ。1726~50年は~20石層が最大石層であり、高持平均値が低いことに注意。

付表-4 武生地域

階 型	1726~1800											1851~1868										
	階高比	親族数	奉公人数	家屋軒数	直屋部分 面積	角部分 面積	非住居部分 面積	合計家 屋面積	居住部分 面積	居住部分 割合	居住部分 割合	階高比	親族数	奉公人数	家屋軒数	直屋部分 面積	角部分 面積	非住居部分 面積	合計家 屋面積	居住部分 面積	居住部分 割合	居住部分 割合
戸数	3768	1.87	0	1.0	2.61	0	0	2.61	1.4	0	1.4	400	3.38	0	1.0	5.38	0	0	5.38	1.59	0	1.59
雑家	4.34	3.67	0.33	1.33	6.17	0.75	0	6.92	1.73	0	1.73	5.4	6.33	0	2.0	6.0	2.09	1.33	9.42	1.22	0.21	1.49
~0石	21.73	4.73	0.33	2.33	8.25	3.62	2.07	13.94	2.35	0.4	2.75	9.7	4.56	0	2.22	8.47	1.78	2.03	12.28	2.25	0.44	2.69
~10石	24.43	5.46	0.41	3.0	8.65	5.93	3.18	17.76	2.46	0.55	3.03	20.0	4.15	0.08	2.0	10.25	1.99	2.85	14.19	2.68	0.67	3.35
~20石	5.71	5.25	0.75	3.75	10.75	8.5	4.75	24.0	3.21	0.79	4.0	15.1	5.63	0.13	2.63	9.54	2.78	3.63	15.95	2.14	0.63	2.77
~40石	1.44	9.0	4.0	4.0	12.0	11.1	6.0	29.0	1.77	1.46	2.23	4.9	3.67	1.33	2.0	12.0	3.33	7.0	22.33	3.07	1.4	4.47
~60石	4.34	6.33	3.0	3.67	22.75	9.33	8.5	40.08	3.38	0.91	4.29	3.8	6.0	0	4.0	20.0	12.0	12.0	44.0	5.38	2.0	7.38
~100石												1.1	5.0	3.0	4.5	20.0	9.5	18.38	47.88	3.69	2.3	5.99
高持平均	62.32	5.2	0.6	2.88	9.56	5.36	3.15	18.07	2.57	0.55	3.12	60.0	4.77	0.31	2.51	10.25	2.56	4.05	16.86	2.62	0.81	3.32
平均的 村概況	%	人/戸	人/戸	軒/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	%	人/戸	人/戸	軒/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸	坪/戸

(注) 一坂井地域に同じ。1726~50年の資料がないので、1776~1800年を示した。

で試みてみたい。

まず、近世民家が形成された時代の社会的背景をみよう。

近世社会は、太閤検地にはじまる初期の諸検地と兵農分離を軸として、中世の土着領主・農民層を再編し、自営小農民層の成立をはかり、その基礎の上に体制を成立させたとされている。以後、明治維新まで続く近世社会は、1700年初頭と1800年頃を境とし、それぞれ近世前期、中期、後期と区分されている。近世前期には、土豪・農民による新田開発がさかんに行なわれ、人口増加も活発で、自営小農民の自立を促進したため、農民からの貢租収入にもとづく幕府財政収入の拡大を可能としたが、18世紀に入ると、新田開発が停滞するため、幕府は財政上の問題をかかえるようになる。このため、享保の改革では、貢租収入の増加をはかるため小作料の取得を認め、町人による新田開発を推進するとともに、貢租確保のため一度出した「質地流れ禁止令」の撤廃や「田畑永代売買禁止令」の罰則を緩和する。新田地主・質地地主の公認、年貢免の強化等による自営小作農民の土地喪失と1部農民への土地集中、大高持化が進行する。そして、18世紀後期には、幕藩体制の基盤である自営小農民層の分解や都市への人口流出が続くため、寛政の改革がおこなわれ、一連の都市政策とともに、「人返し令」「出稼禁止令」「商品作物制限」等の農村再建策が実施される。1841～43年には、同様の目的をもつ天保の改革を行なったが、農村への商品生産・貨幣経済の浸透もあって、小農民層の分解は、さらに進行する。前期に確立した奉公人を用いた大高持層の大手作農業も、手作得分より地主得分が有利になるにつれ、体制の枠内で寄生地主的なものに変化し、その上、地主得分の公認による新田開発や、貢租確保のための質地地主公認も、幕府財政の1時的回復にとどまり、農民の全剰余部分を吸収するため自営手作農民層に基盤をおいた幕藩体制は、その体制的矛盾を進化させながら近代をむかえる。すなわち、中世の「譜代下人の使役による大農経営」から近世前期における「独立自営小農民層を中心とする手作農業」を基盤とする幕藩体制の成立、さらに、中期の「小農民層の分解と大高持層の手作経営の変質」による後期の「地主一小作制への移行」という農業経営基調の変化が近世を通じてみられたとされる(注-2)。

越前地方においても、元禄期までの活発な新田開発や人口増加は、享保以降みられなくなる(注-3)。そして、関東や東北の養蚕・製糸地帯と類似し、商品生産がかなり発展していたにもかかわらず畿内等の先進地のような中農の富農化はみられず、自営小農民の貧窮・零細化と無高化が進み、富農への土地集積が近世後期に著しくみられ、近世後半に頻発した飢饉が自営農民層の分解を一層促進した。(注-4)

越前農村の1戸当り居住者数から農業生産をみると、1700年代には、高持下層と雑家層(無高)の人別帳記載の居住者は、老人・女・子供が多く、その1戸当り居住者数も少なく、青壮年層はあまりみられず、親族内の労働力は奉公人として放出されていた。高持上層の百姓は、これら下層の労働力を吸収し、親族と奉公人を合計した上層農民の1戸当り居住者数は、保有石高に比例し多く、牛馬も所有し、その保有地を手作するに十分な労働力を確保していた(注-5)。これら村内の上・下層には含まれた～10石層を中心とする高持中層は、奉公人を保有せず、親族を奉公人として放出することも少なかった(注-6)。すなわち、高持上層は保有地の1部を手余り地として下層農民に耕作させることはあったかもしれないが(注-7)、高持各階層は、その保有石高に見合った労働力を保有していた。しかし、1800年代に入ると、高持下層及び雑家層の親族からなる1戸当り居住者数は増加傾向をしめし、高持上層の1戸当り居住者数は奉公人が減少するため、上層ほど減少が著しく、各階層の1戸当り居住者数の差は前年代より縮まる。地域差はあるが、この傾向は幕末ほど目立ってくる。大高持層には、手作経営のための十分な奉公人はみられなくなり、高持下層と雑家層は、農地耕作に必要な労働力を蓄えつつあった。これら各階層の戸当り居住者数の年代差は、後進地越前でも、大高持層の奉公人を使用した手作経営が、地主経営に変化し、高持下層及び雑家層は、奉公人供給層から自小作または小作層に変化していったことを示すもので、近世の農業生産構造の変化と対応した動きといえる。

こうした近世中期から後期にかけての手作経営から地主経営への農業生産構造の変化は、単に村落内の労働力の移動にとどまらず、農業経営の重要な要素でもある農民家屋にも変化を与えていた。前章で要約したように、近世中期・後期とも、越前村落農民は、保有石高にしたがって、居住者数ばかりでなく、その所有家屋にも階層差はみられたが、同時に、これらは年代とともに変化している。これら家屋の階層差と年代差は、構成家屋・家屋軒数・家屋形式・1戸当り家屋面積・家屋構法に存在していた。

まず、構成家屋をみると、～10石層以下は住居部分家屋しか所有せず、非住居部分家屋を所有することはなかったが、～20石層以上は非住居部分家屋を所有し、その所有家屋呼称も上層ほど多彩であった。しかし、幕末に近づくにつれ、～10石層にも非住居部分家屋がみられるようになる。高持上層は農業生産に直接関与すると思われる小屋よりも収納用家屋である土蔵の増加が著しいという特色があった。家屋形式は、奉公人の多い年代・地域・階層ほど角屋型家屋が多く、その角部分の面積も奉公人数とほぼ比例していた。高持下層と雑家層の家屋は直屋型家屋のみからなるが、幕末に近づき、1戸当り居

住者数の増加にともないその規模も大きくなる。また、各階層の1戸当り家屋面積（住居部分と非住居部分を合わせた面積）には必ず石高による階層差がみられ、幕末ほど、その階層差は大きい。しかし、この幕末の1戸当り家屋面積の階層差の拡大は、住居部分面積ではなく、主に高持中・上層における非住居部分面積の増加によって生じている。

この1戸当り家屋面積を1戸当り居住者数とのかかわりからみてみよう。家屋面積のうち住居部分面積を居住者1人当りでみると、最上層と最下層の比較では差がややみられるが、各階層とも居住者1人当り住居部分面積に大きな差のないことが、1700年代の特徴であり、幕末に近づくにつれて、地域によって階層差はやや広がる。住居部分面積の大きい高持上層は、1700年代に手作経営をしていたため、奉公人・親族とも多く、面積の小さい村内下層は居住者数が少なかったため、居住者1人当り住居部分面積の階層差は小さかった。上層農民は、牛馬を保有していることを考えると、居住者1人当り住居部分面積に関するかぎり、階層差はなかったといえてよい。また、幕末に近づくにつれ、奉公人が減少するため、高持上層の1戸当り居住者数は減少し、高持下層と雑家層の居住者数は増加するので、居住者1人当り住居部分面積の階層差はやや大きくなる。しかし、居住者数の移動ほど居住者1人当り住居部分面積の階層差が生じなかったのは、下層農民の住居部分面積がやや大きくなったためであった。一方、非住居部分面積は、奉公人をかかえた高持上層に多くみられ、高持中層以下には全くみられなかったため、1700年代の居住者1人当り非住居部分面積にも、かなり大きな階層差がみられたが、幕末に近づくにつれ、これの所有階層の拡大と上層を中心とする土蔵の増加が著しくみられたので、居住者1人当り非住居部分面積の階層差は幕末ほど大きくなる。このため、居住者数の階層差は小さくなったが、住居部分と非住居部分を合計した居住者1人当り家屋面積の階層差は、1700年代より1800年代のほうが大きい。この理由としては、越前において、近世中期には、再生産に必要な部分以外は貢租その他として収奪され、大手作を行なう大高持層に座敷・土蔵等が剰余部分として残されたにすぎず、非住居部分を中心とする階層差がみられたにすぎなかったが、1800年代になると、地主得点が認められたこと等による剰余部分が高持中層にまで及ぶ得点として村落内に蓄積されたためと思はれる(注-8)。この結果、居住者1人当り家屋面積の階層差は、幕末ほど大きくなり、中層では小屋、上層では収納用の土蔵が増加した。もちろん、近世後期の商品農産物の増加も、米を中心とする近世の貢租体系からの収奪の落ちこぼしを大きくし、家屋面積の階層差を拡大していったものかもしれない。また、幕末の経済先進地・武生地域では、住居部分にもかなりの

居住者1人当り面積の階層差がみられ、1戸当り家屋面積も他地域と相違した階層差であった点は注意すべきであろう。

しかし、近世における居住者1人当り住居部分面積にみられる小さな階層差も、家屋の質をきめる家屋構法からみると相違している。居住者1人当り住居部分面積がほぼ同じであっても、高持上層の家屋は、床や柱立構法で、より高度な技術と材料を用い、座敷・仏間・角屋・水屋・馬屋といった多くの角部分を持ち、非住居部分面積も大きく、小屋よりも土蔵が多く、村内下層とは質的な差がみられた。さらに、上層には多くの奉公人がみられ、その生活の場は、親族居住者とくらべ限定されていたであろうから、居住者1人当り住居部分面積が同じでも、親族居住者の居住条件は、上層と下層でかなり差があった。近世農民の居住状況の階層差は、単位面積的な面より質的な面に存在したといえよう。

近世民家は、それぞれの時期の農業生産のあり方と強い関連をもちながら形成されてきたと考えられる。

6-3 近世越前の角屋型家屋

本研究で考察した近世越前地方は、その南部を近江・若狭地方、北部を加賀地方と接するが、周囲は海と山で囲まれ、その内陸は水運に用いられた九頭竜川とその支流である足羽川・日野川・竹田川流域に広がり、中央を北国街道がつらぬく。地形・物流・交通面からみて比較的まとまった地域であったが、越前民家には、かなりの地域差が存在していた。家屋面積は、南の武生地域と他地域の間に大きな差があり、一般に、家屋面積の大きい南部ほど角部分も多く、角部分面積も大きかった。そのため、角屋型家屋は南に多く、北に少なかった。その角部分家屋の呼称分布を北から順にみると、座敷・角屋・水屋・馬屋のうち、坂井地域に水屋・馬屋はなく、福井地域は馬屋が多く、丹生地域は馬屋・水屋がほぼ同数、南の武生地域は水屋が特に多かった。座敷・角屋は各地域にみられたので、南部ほど人間生活に関係の深い角部分が多く、その面積・所有率も大きかった。

角屋型家屋の直屋部分を含めた直屋の平面形状は、桁行/梁行比 1.5 以上が多い越前北部坂井地方の竹田川流域と、その比 1.4 以下の正方形に近いものが多い他地域に分けられるが、一般的傾向として、北部より南部が、また、面積の大きい直屋より小さい直屋のほうが正方形に近くなる。角屋型家屋も少なく、高持上層の面積の大きい家屋だけに角部分がある越前北部とくに竹田川流域の角屋型家屋は、角部分面積も小さく、その呼称も座敷・角屋と少ないので、いわば、長方形平面の直屋に、小さな角部分がついた角屋型家屋といえてよかった(注-10)。これに対し、南部の武生地域には高持下層にまで角屋型家屋がみられ、上層の角部分面積は、その直屋部分面積と匹敵し、呼称も座敷・角屋・水屋・馬屋と多く、規模

の大きい水屋と正方形に近い直屋部分を、その角屋型家屋の特徴としていた(注-10)。北部の角屋型家屋は、幕末に激減するが、武生地域は幕末になっても角屋型家屋が多い。また、越前の北と南では、「妻入」と「平入」の別があること、角部分が「側面」「背面」のみと、「正面」にもみられる等の差があるといわれる(注-11)。そして、角屋型家屋の発達と後退が、奉公人数の増減と強い関連をもつことは、今までにも指摘してきた。

図6-1は、越前の角屋型家屋を地域別にモデル化し、その特徴を示したものであるが、このような角屋型家屋の家屋型の地域差と、角屋型と直屋型家屋の分布上の地域差と年代差がなぜ生じたかは不明である。しかし、こうした地域差のみられる越前地方の角屋型家屋も、他地域の中門や曲屋のような突出部をもつ家屋とくらべると、その角部分の構成方法には共通点がみられる。つぎに、越前地方と同じ日本海沿岸の秋田(羽後)等にみられる「中門」、岩手(陸中)の「曲屋」と本研究の越前の角屋型家屋(以後、「角屋」と呼ぶ)を比較し、越前の「角屋」の特徴をみてみよう(注-12)。

図6-2は、これら3種の家屋型の平面をモデル化したものである。「角屋」と「曲屋」「中門」の間の大きな相違は、出入口の位置、出入口からつづく土間と床上居住部の関係、突出部の機能と規模とその表現である。まず、出入口は、「角屋」の場合直屋部分にあり、「曲屋」

「中門」では突出部にある。この点、「角屋」は直屋型家屋と同じである。さらに、「角屋」は、出入口が正面中央に来るため、平入・妻入のいずれも、出入口につづく土間は直屋の前半部に、床上居住部は後半部に位置し、角部分は直屋の左右側につくことが多い。「平入」家屋の場合、方形に近い平面形が多い。「曲屋」「中門」は、出入口が直屋部の端部から前方へ突出する馬屋と複合して作られているため、出入口に続く土間は、突出部のある直屋端部にあり、土間部と居住部は左右に区分される。この点で、「曲屋」「中門」は、各地にみられる直屋家屋と同じ家屋平面パターンをもち、「角屋」は、加賀北部・若狭・近江湖北地方にみられる家屋平面パターンと同じである。また、「曲屋」「中門」は、出入口と馬屋が複合され、土間と強い関連をもつ複合機能の直屋正面からの突出部で、その規模も大きい。「角屋」は、武生地域の水屋を除くと、直屋正面から突出する角部分をもたない。この武生地域の水屋は、出入口に続く土間一居住部と複合し、規模も大きい。馬屋としての「曲屋」「中門」と武生地域の水屋としての「角屋」は、主機能が馬屋と水屋の相違はあるが、ともに、複合機能をもち、直屋正面より突出している点で類似している。しかし、越前の水屋以外の座敷・角屋・馬屋といった角部分は、背面又は側面から突出し、規模も小さく、「中門」のある地域にみられる座敷等の「ウラ中門」や埼玉にみられ

た直屋からの突出部(注-13)に類似し、単一機能の突出部が直屋内隣接部と関連し、付加された形をとる。この種の角部分が多い地域と階層は、幕末に近づくにつれて、角部分を失ない、角屋型家屋は少なくなる。規模も小さく、単一機能であるため、角部分の付加と分離あるいは直屋平面へのとり込みも容易であったためであろうか。これに対し、正面へ突出した水屋は、直屋化するには規模も大きく、直屋内機能との関連も強かったので、幕末にも消失せず、「角屋」として定型化していったのであろう。また、表現も、「曲屋」「中門」は規模が大きく、目立つためか破風や明り取り窓で形がととのえられ、特に、突出部正面に出入口をもつ「中門」は、突出部の表現をデザイン的にも重視している。しかし、直屋部分に出入口のある越前の「角屋」は、出入口のある直屋部分の表現が尊重され、角部分を特別に重視していない。

近世越前の角屋型家屋の角部分の多くは、居住者数・構成員・村内での役割・牛馬の有無等から要求される家屋機能と小さな直屋部分面積との関係を調整する役割を果たしていたのであろう。越前の角屋型家屋が「ツノヤ」と呼ばれ、「中門」でも「曲屋」でもなかったのは、その本質をつく、すぐれた呼称といえよう。

坂井地域	福井地域	丹生地域	武生地域
長方形直屋、 角部分が小さい。 幕末角部分なし。 角部分は背面に。 水屋馬屋なし。 牛馬は直屋側(?) 角屋型は上層、 妻入。	直屋は方形に近い。 角部分が小さい。 幕末角部分なし。 角部分は背面に。 水屋は少ない。 牛馬は馬屋で、 角屋型は上層、 妻入・平入(?)	直屋は方形に近い。 幕末水屋は大きく、 幕末角部分増加。 角部分は背面に。 水屋馬屋は複合型。 牛馬は馬屋で、 角屋型は上層、 妻入・平入(?)	直屋は方形に近い。 幕末水屋は大きく、 幕末角部分あり。 角部分は正面にある。 馬屋はとどろし。 池地域別面種大きい。 角屋型は中層上層 平入。

(注)「福井県の民家」を参考とし、平面の類型化を行った。

図6-1 越前の角屋型家屋の類型

角屋(越前)	曲屋(陸中)	中門(越後・羽後)
直屋正面に 破風がある	曲屋正面に 破風あり。	中門正面に 破風・明り窓

図6-2 突出部をもつ家屋型の類型

6-4 史料の区分指標

本研究では、史料を年代・地域・階層の面からいくつかに区分し、各区分の統計値を比較・考察し、近世越前民家の集団的特質の変化過程を追っている。区分の具体的方法は、本研究論文の「その1 村落の構成と家屋の呼称」(注-14)で述べたが、本章では、各区分指標の適否について、補足的考察を行なう。

年代区分は、元号ではなく、西歴を指標とし、25年間を1区分としている。一定期間毎の家屋変化を統計値平均でみるには、西歴によるほうが、近世という時代を連続してみるのに都合がよい。さらに、近世農民の石高の移動は予想以上に多く、はげしいといわれるが(注-15)、これらが家屋にも反映するため、近世の変質期には、かなり家屋の変化も大きい。社会変化がゆるやかな時代は、家屋の変化もすくないので、年代区分の長さは、25年間より大きくてもよいかもしれない。しかし、ここで看過してはならないのは、木造建築では、家屋と居住者の関係が深く、維持の良否が家屋の寿命に直ちに現れる点であろう。この意味で、世代の交代は重要な視点であり、石高の移動、家族数の変化、家屋への影響という流れを考えると、1世代30年という点も軽視できない。以上の点と家別帳の残存状況を考えると、本研究の25年間区分は、100年間の4分の1と区分しやすく、考察の便からみても適当であったといえよう。

地域区分は、地域内村落の経済・社会条件を等しくするため、まず、漁村・手工業村・宿場村を除外し、農山村に限定し、旧郡区分に準じて決定した。旧郡区分は、地形・地理的条件にしたがって決定されているので、自然条件に左右されることの多い、近世農山村の社会・経済条件を比較的反映すると考えられる。地域区分が適当かどうかは、考察目的によって相違するが、本研究は、地形的に比較的まとまりのある越前地方の農山村の家屋の状態を社会・経済条件との関連の上で考察することを目的としている。一定の地域の内部にみられる地域差を考察するためには、まず、地域区分をしなければならないが、その地域区分が適当であったかは、考察を終了しないと判らないという状況を考えると、都市計画研究で使用するメッシュ法のような無作為で、均等な面積をもつ区分方法のほうが適当かもしれない。しかし、本研究では、区分地域間の家屋の地域当り数値でなく、各地域の家屋型の比率・戸当り・居住者当り数値を比較・考察の対象としているので、地域の大きさはそれほど厳密でなくてもよく、考察単位がその地域の社会・経済あるいは地理的条件をよりよく反映するよう考えればよい。したがって、区分時の問題は、農山村という村落規定と区分のスケールが比較・考察上適当な大きさであればよいことになる。以上の点からみて、本研究で用いた4地域区分は、越前民家の地域状況を把握するという目的に

とって、大きな不都合はなく、史料数の不足からくる統計値のかたよりを考慮すればよいように思う。

階層区分は、石高を区分指標として用い、戸数の多い下層は石高差をこまかく、戸数の少ない上層は大きく区分した。各年代・各地域とも、幕末の1部地域をのぞくと、石高順に家屋の変化がみられるので、近世農民の階層区分指標として、石高制は充分に有効と考えられる。しかし、近世民家研究のための階層区分としては、本研究で用いた石高指標による区分方法の他に、村役・一般百姓(高持)・水呑(無高)を用いることもあるので、この区分指標について、以下で検討しよう。

階層(stratum)は、一定の尺度(prestige scale)で識別される必要があるとされるが(注-16)、この区分方法は、村役という村政上の役割の有無と高持(一般百姓)・無高(水呑)という石高の有無という2種類の階層区分の指標が混在して用いられている点、また、大きな格差が存在する高持層内部の階層差が不明な点に問題がある。近世初期の村役、とくに、庄屋(名主)は中世末の土着領主が太閤検地以後、村政の責任者として「百姓」身分化したものが多く、その家柄と経済力は一致していた。とくに、後進地に多くみられる「1人百姓」「おとな百姓」と呼ばれる庄屋の多くは、後に、高持下層民や無高水呑層となった中世の下人層の主筋にあたり、これら庄屋・村役層百姓と一般の高持百姓とは、支配者と被支配者に近い関係があった。このため、近世前期の村役への就任は、世襲によることが普通であったが、近世中期以降になると、庄屋の家柄をもつ百姓の中には、没落するものもみられ、没落しないまでも、他に有力な百姓が現れるようになると、有力高持百姓間の輪番制、あるいは、入札(選挙)による村役も多くなる。とくに、庄屋補佐役である長百姓(組頭)、中期以降定着する高持百姓の代表である惣代・百姓代は、一般高持百姓の中から選ばれるようになる。越前においても、村方3役は、必ずしも、村内最上層の百姓から選ばれず、村内の高持中間層以上の百姓から選ばれる例も多くなっている。

以上のような、近世、とくに中期に入ってから生じた村役の出身階層の変化を考えると、村役を階層区分の上で高持層の最上層の指標として、一般的に用いるのは適当でないと考えられる。村役といえども、百姓身分であり、村役となった百姓層の家屋には、藩役人をむかえるため特別な接客用家屋部分をもつものもみられるが、これとても、経済的裏付なしに建築することはできない。とくに、家屋禁令が、近世中期以降の各地にみられる点から、建築技術の一般化とともに、経済条件が家屋規模等の決定に主導的役割を果たすようになったと考えられる。また、階層構成によっては、各村落の一般百姓(高持)層の石高平均値に村落差がみられ、その石高平均値とスライドして、それぞれの村の家屋規模平均値も上下

6—1 の今立郡大滝村「家付人馬改帳」の周防家の家屋は、主屋だけで 9.5 間×11.5 間ときわめて大規模で、他の家屋を含め、必ずしも「家別帳」で過少記載がなされていたとは思えない(注-28)。この周防家の家屋が事実であるなら、表の惣左衛門家の家屋(2.5 間×4.0 間)も実態を反映していたと考えてよいだろう。同様の記載形式で、同程度の規模の家屋が各年代・各地域の「家別人別帳」にみられるので、同一の作成規準にもとづいて、各地域の文書が作成されていたことはたしかである。しかし、「宗門改帳」で労働力とならない幼児を人別帳記載から省いたような文書作成規準があったかもしれないが、現在のところ不明である。

現在までのところ、「家別人別帳」の記載内容が、家屋のどの部分の規模を示しているのか、たとえば、上屋梁間・桁間部分なのか、主屋梁行・桁行部分なのか、あるいは、下屋・庇を含む全家屋規模なのか不明であるが、記載内容が家屋の一定部分の規模を示していることはたしかであろう。今後、解明されなければならない問題は、各種文書の家屋規模の記載部分を明らかにすることである。しかし、これまでの論文で考察したように、年代・地域・階層別の家別帳家屋の統計値は、一定の傾向を示しており、すくなくとも、その定性的関係は信頼してよいのではないだろうか。ここで検討した疑問点は、村方文書ばかりでなく、近世文書による家屋研究にとって、きわめて重要な問題でもあり、今後の研究課題としたい(注-29)。

おわりに

近世民家の研究資料は、遺構資料と文献資料に大別できる。近世民家が家屋遺構として残るためには、単に偶然によるばかりでなく、まず、長期にわたる人々の使用や風雪に耐える材料と技術を使用していること、時代とともに変る生活上のいろいろの要求に対応しうる家屋であること、家屋の維持・管理が長期にわたって適切に行なわれていること等の条件をそなえていたからであり、これら条件を欠くため、下層農民の家屋遺構は絶無といってもよい。また、近世越前の平均的農民である ~10 石層および、それ以下の階層は、村落戸数の 80% 以上にもなり、家屋遺構を残す可能性のある上層農民は 20% 以下と考えてよく、村落農民の大多数、いいかえると、近世の圧倒的多数の人々が、どのような家屋に住んでいたかを遺構資料でのみ知ることはできない。さらに、家屋の記録を含む文献資料は各種みられるが、このうち「家別人別帳」は、規模を中心とする公的な家屋調査資料であり、量的にも多く、各地にみられ、全階層の家屋と社会・経済的側面も含み記録しており、不明な点もあるが、近世農民家屋研究の貴重な史料である。本研究では、遺構による民家研究の空白部分である下層農民を含む村落内の全階層の家屋と居住状況の変化とその背景

を、統計的手法を使って考察してきた。今後とも、研究を進め、とくに、近世前期の住居の問題をさぐってゆきたい。

なお、「越前国宗門人別御改帳」(全 6 巻)記載家屋の整理を昭和 46 年にはじめ、中断をくりかえしながら、本論文でようやく一応の終了をみる事ができた。この研究を終るにあたって、膨大な史料を「越前国宗門人別御改帳」としてまとめられた佐久高士博士に、これらを研究資料として利用させていただいたことを、まず、感謝したい。また、横浜国立大学の河合正一教授をはじめ多くの方から示唆と励ましをうけたこと、関口欣也助教授・鈴木亘助手他の方から研究上の助言をうけたこと、さらに、論文審査の段階で、審査委員の方からの指摘により、補足事項その他を加えることができたことを深く感謝するものです。

〔注〕

- (注-1) 「家別人別帳による近世中期以降の越前民家」の表題の下に、5 編の論文として、日本建築学会論文報告集 (No. 238, 239, 240, 242, 250) に発表されている。
- (注-2) 近世社会体制の理解は、研究者により相違するが、本研究は「近世史ハンドブック」(近藤出版社)、「小辞典日本史」(岩波書店)記載のものを通説と考えた。
- (注-3) 「近世農村の数的研究」佐久高士, p. 395。
- (注-4) 「福井県の歴史」印牧邦雄, p. 177。また、(注-3) 資料の p. 382 によると、近世後期に無高戸数の増加が著しく、高持層戸数は横ばいであるが、1 部農民への石高の集積があったという。なお、本研究の「その 1 村落の構成と家屋の呼称」(論文報告集 No. 238) の図 1—6 をみると、雑家層と高持上層の比が増加し、~10 石層以下の高持層の割合が減少していることがわかる。
- (注-5) (注-3) 資料の p. 453 (牛馬と耕作)。
- (注-6) 高持上層の親族で奉公人として他出するものもいたが、町方へ奉公することが多く、下層農民の奉公先は、村内または近隣の村の高持上層の百姓であることを、人別帳で知ることができる。
- (注-7) 上層農民の手余り地を耕作する下層農民は、中世以来の身分関係にもとづく場合が多く、経済関係を主とする地主—小作人関係とは相違するといわれる。
- (注-8) 「幕藩体制社会の成立と構造」安良城盛昭, p. 117。第 5 節の「百姓」全剰余労働の搾取、に元禄・享保以降の地主制成立の条件が論じられている。
- (注-9) 「福井県の民家」福井県教育委員会(伊藤延男, 宮沢智士他)によると、坂井地域の家屋は、「妻入」で、背面に「座敷」をもつものが多く、足羽郡を含む福井地域は、「妻入」で、側面に「水屋」と「馬屋」をもち、背面に「座敷」をもつという。
- (注-10) (注-9) 資料によると、武生地域の家屋は、「平入」で、正面に「角水屋」をもち、側面に「馬屋」を、背面に「座敷」をもち、角部分がよく発達しているという。
- (注-11) (注-9) 資料を参照。
- (注-12) 「秋田県の民家」秋田県教育委員会(関口欣也)、「岩手県の民家」文化財保護委員会(伊藤延男, 吉田 靖)、「石川県の民家」石川県教育委員会(伊藤延男他)、「湖北地方民家の編年と類型」大岡 実他(論文報告集 No. 66)、「民家は生きてきた」伊藤ていじ, 等を参考としてまとめた。
- (注-13) 「埼玉県の民家」埼玉県教育委員会(関口欣也)の「武州江ヶ崎村百姓家小前絵図」(p. 28~44)。

- (注-14) 本研究の「その1 村落の構成と家屋の呼称」(論文報告集 No. 238) の「1-2 考察の方法」。
- (注-15) (注-3) 資料の p. 342~368。
- (注-16) 「講座社会学・別巻」(東大出版会) の p. 141。
- (注-17) 「近世村落形成の基礎構造」安沢秀一の p. 3 に「一たん定められた村高に対して名寄帳登載の農民は、村高の分割分所有者として現われ、現実の生産力の乖離は、検見ならびに免の掛け方によって調整されているのである」とあり、石高が現実の生産力を示さず、一つの生産力の指標となっているという指摘がある。しかし、石高以外に、実際の生産力を推定するものがないので、各百姓の石高に頼らざるをえない。
- (注-18) 越前の「水呑」は「雑家」と呼ばれ、他に配偶者のいない雑家の意味の「孀」、吃喰、取上婆の呼称もある。なお、(注-3) 資料によると、「人別帳などのメを見ると始めは、百姓・水呑であったが、次第に、百姓・雑家・水呑・孀・吃喰となり」(p. 282)、「雑家は高を持てば百姓となり、水呑は高を持ってもその身分を離れることはできない」(p. 283) とある。但し、本研究の資料には、水呑の呼称はみられなかった。
- (注-19) 史料の記載例等については、(注-14) 資料の「1-1 史料の概要」を参照。
- (注-20) 「近世農村の歴史人口学的研究」速水融 p. 7。
- (注-21) (注-20) 資料の p. 141。
- (注-22) 「近世封建制の土地構造」竹安繁治の p. 3~17 に、元文~延享以降の幕府の土地政策の転換による「縄延び」「隠田」「下免地」等の黙認化が論じられている。
- (注-23) (注-8) 資料の p. 105~107。
- (注-24) 「近世村方文書よりみた相模国三浦郡本古庭村の屋敷と家屋」山田弘康(論文報告集 No. 221, No. 222)。
- (注-25) (注-13) 資料の p. 28~44。この絵図には、村内戸数 77 戸のうち、「小屋又は悪原家」をのぞく 55 戸が記載されており、全百姓の家屋を記載したものではない。なお、「日光社参史料よりみた享保 12 年の下野岩原村の民家について」津田良樹(50 年度、学会大会梗概集)によると、この文書は、日光社参時の宿舎調べに際し、作成されたという。
- (注-26) (注-9) 資料。
- (注-27) 「重要文化財住宅修理報告」福井県教育委員会。
- (注-28) 「越前国宗門人別御改帳」佐久高士編、第 4 巻の p. 851~938。なお、「日本の農民家屋」草野和夫、p. 102 に、文久 2 年の家屋平面図が記載されている三田村家は、表の周防家と同じである。この三田村家は、天正以来、歴代領主に奉書を貢納し、奉書紙職の特権が与えられ、後に、幕府・福井藩の御用紙を製造した御紙屋筆頭をもつとめた(注-4 資料の p. 154)。大滝村の庄屋は、彦右エ門で、周防家は村方 3 役に名を連ねていない。
- (注-29) 本論文の脱稿後発表された「日光社参資料よりみた江戸中期の民家について」津田良樹(建築雑誌、50 年 11 月)に、上屋部分の梁間寸法で家屋規模を記載した文書の報告がある。この梁間記載は、家屋絵図の註記として

余白に記入されている。この例から考えると、家屋規模の記載は、梁行と桁行でなく梁間と桁間でなされていたと考えられよう。以下に、家屋規模の文書記載例を示すが、この問題は、別の機会に考察をしてみたい。

[家別帳の記載例]

1. 式間四間 本や
(寛永十年肥後国永村人畜改帳)
2. 家三間半^ニ 二間
(寛永二十一年河内国碓井村家数人数万改帳)
3. 本家 五間 但し ほつ立
九間 かやふき
(承応三年信濃国臼田村家別人別帳)
4. 家一軒 二間半三間半
(享保十四年越前国後山村高家人馬御改指出帳)

[家下改帳の記載例]

1. 本家 長五間
横三間
(元禄四年相模国本古庭村家下反歩改帳)

[絵図註記の記載例]

1. 八間^ニ 三間(絵図余白、梁間記載)
(享保十二年下野国岩原村御百姓并分ヶ百姓居家
絵図改書上ヶ帳)

[破損家屋届の記載例]

1. 本家潰れ 間口七間半奥行三間
(安政年常陸国下志筑村破家書上帳)

[家作願の記載例]

1. 「梁三間桁行三間半(以下略)」(絵図家屋規模は 3.5×5.5 の直屋で、桁行に下屋と庇が計 1.5 間ある)
(宝歴八年山城国上粕村家作之御願)

[棟札の記載例]

1. 梁行四間 桁行九間半 (梁行は梁間を意味し、梁行 5 間で
ある)
(寛政五年河内国中西家棟札)

[材木伐採願の記載例]

1. 式間 但し ほり立
四間 かやふき (ほり五丁、長式間の条があるので、「式間」は梁間を示すと思われる)
(明歴八年信濃国畑八村)

[家屋焼失届の記載例]

1. 梁間四間、行間七間
(安政五年羽後国天王村)

[家屋禁令の記載例]

1. 高六石より拾石迄 但式間梁或ハ式間半梁ニ行間八間ヲ限(以下略)
(文政七年会津藩)
2. 「座敷二間半梁にすべからず」
(寛永二十年徳川禁令考)

[その他の記載例]

1. 「間口九間奥行四間余(以下略)」
(安政四年 きりもぐさ 小林葛古)

SYNOPSIS

U.D.C. 728.603(521.4)

FARMER'S HOUSES OF ECHIZEN AREA, A STUDY OF HOUSE AND FAMILY REGISTRATION BOOKS (IHEBETSU JINBETSU CHŌ), 1719-1868.

Part 6 The Fundamental Structures Shaping the Farmer's Houses.

By HIROYASU YAMADA, Yokohama National Univ., Member of A.I.J.

Contents,

- 6-1 An outline of the changes of farmer's houses, Echizen area.
- 6-2 The fundamental structures shaping the farmer's houses.
- 6-3 The reliability of the registration books.
- 6-4 The classification methods of the data.